
雨—標のない旅—

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨―標のない旅―

【Nコード】

N3891A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

世のすべての者は、出逢うべきものに出逢い、幸せを掴むだろう。けれど、その例外とてないわけではないのだ。血の因縁に導かれし少女・千早。彼女のさだめの旅が、今、幕を開ける。

序章（前書き）

こんにちは、維月十夜です。

『雨―標のない旅―』のお届けに参りました。

今回は、雨をベースとした物語を書いてみようと思い書き殴ってみました。（笑）

拙く、面白くないかも知れませんが、よろしくお願いします。（ぺこり）

序章

世のすべての者は、出逢うべきものに出逢い、幸せを掴む。それが、

生きとし生けるものの さだめ
けれど、その例外もないわけではないのだ。

恐ろしきは、その 血 の濃さ。

幾世代重ねようと、決して薄まろうとしない血の呪縛。
生きるだけなのに、こんなにも辛い。
だから、

私は掟を作った。

【この血は、私の代で必ずや絶やす】と。
異形の血は――耐えるが定め。

――これ以上、不幸の種をまくことは罷りならん。

始まりの雨（前書き）

世のすべての者は、出逢うべき者に出逢い幸せを掴むだろう。
だが、その例外とて無いわけではないのだ。

異形の血を引いて生まれてきた赤子。

彼女に未来はなかった。

まがつもの

禍者として連れ去られ、処分されようとしていたのだ。

雨の日の別れ。

死。

そして、雨と血。

物語は、ここから始まった！

始まりの雨

――解っていたはずだ、その子は……の血を引いている。

【目覚めたか、対極のうちの一つ目】

【こ奴は禍者だ、殺してしまえ……禍わざわいが生まれぬうちに】

――ドン――！

「やめて！ やめて頂戴っ」

【ええい、しつこい奴……離れい！】

「ああっ」

火のついたように泣き叫ぶ赤子。

勢いに負けて転んだ女の白い頬を、泥が赤黒く染めた。

「お願い、殺さないで！ 後生ですっ、この子にだって、生きる権利はあるでしょうっ？」

【うぬっ……黙れ、黙らぬか！】

二人のうちの片割れの男が、これ以上の抵抗を阻んで、なおも女の頬を打つ。

無骨な男の手が、赤子を抱いた母親から赤子をもぎ取る。

雨に濡れた男の顔半分を、張り付いた墨色の髪が覆っていた。顔を覆い隠す髪の合間から除いた目は、深紅――――。

慈悲を知らぬ――そう、まるで鬼のようで。

女はぞっと肩をすくめて一歩後じさった。

【これが今生の別れ……忘れるが、おぬしの為じゃ】

男は云った。

今生の別れと……。

「そんな……っ、どうして、どうして……っ」

どうして、普通に生きることができなかったのだろう？

どうして、この子だけが。

呪いは、どうしてこの子に目を付けたのか。
呪いだ。

解っている。

分かりたくないのに、解ってしまっている。
この世に、生まれてきてしまったから。

だが、

わが子の死を願う母が、どこにしようか。

なのに、助けられなかった。

泣き崩れた女の肩を、雨滴が容赦なく打ちすすめる。

「うつつ、うつつ……うああ、——」

か細い慟哭が、鈍色の曇天を裂いた。

雨音が、ひととき濃くなった。

女は頸くびを括った。

雨音が、すべてを掻き消していく。

その日も、雨が——降っていた。

鬼子（前書き）

新たな呪いが・――・その目を覚ます……

なに不自由なく育てられた現代の少女、千早。

しかし、彼女は呪いを継いで、この世に生を受けたのだった!？

鬼子

ほぎゃ……ほぎゃあ！

19XX年、X月XX日。

某市の病院で、一人の赤子が産み落とされた。

【生まれたか、対極がうち二つ目……我が姫よ】

はたはたと、コートの裾がビル風に翻られて翻る。

高層ビルの屋上で、口許を面布で隠した男がぽつりと呟いた。

【だが……まだだ、まだ早い】

次には、そこに男の姿はなかった。

【また来ようぞ……その蕾、花開くときに】

風が、そう呟いた。

千早と名づけられた赤子は大切に育てられ、なに不自由なく成長
していった。

郊外の邸宅で、外界から隔絶された暮らし——いわゆる『お嬢様』として世話をされて今へ至っている。

だが千早が5歳の時、異変は現れた。

「あら……なに、かしら？ 千早、目は痛くない？」

「おめめ？ ううん、痛くない」

こしこし、と頻りに目を擦る千早の頭を、母が心配そうにそつと撫でる。

生まれつき色が薄く茶目だったのだが、少しずつ色が薄まり、遂に金色に変色してしまったのだ。

「どうしたのかしらねえ、明日、母さまと病院に行きましょうね？」

「うん？」

「ううん、どこにも異常は見られませんねえ。健康そのものです…

…ですが、こんなことは初めてです」

「そんな、なにか他に原因は」

「ありませんね……」

不安に思った母親が、眼科医に千早を診せたが、異常は見つからず仕舞いだった。

「母さま、どうして泣くの？ どこか痛いのか？」
母は知っていたのだ。

「……古くから伝わる、血の呪いを。」

彼女は、どうして 普通 に生きられないのだろうか。

呪いは、なぜこの子に目を付けたのだろうか。

お願い……この子を、人間にしておいて、どうか。

どうか……目覚めないで。」

「泣かないで、母さま泣かないで？」

「ああ……ごめんなさい、千早、ごめんなさいねえ」

涙に咽ぶ母に困りきって、首を捻る千早はその後理解する。

母の悲しみを。

そして……さだめ。

自らが生まれてきた意味を。

血の覚醒（めざめ）るとき（前書き）

連日の悪夢の翌日は、決まって雨降りだった。

それは、この20年間変わることのない不可思議なサイクル……

血の覚醒（めざめ）るとき

千早は、いつも決まって同じ夢を見る。

悪夢だ。

自分が二人いる夢。――そして、二人の自分が争っているのだ。まるで鏡を見るように、そっくりな双子は争う。

ただ、一つだけ違うところがあるといえば、眼だ。

紅い。――血の色の双眸だった。

【どちらかが消えるが定め……】

――消えるのはお前だ！

何度も間合いを詰めて斬り結ぶ、漆黒と血の深紅。やがて、斬り結ばれた刃が火花を上げて散った。

【消えるのはお前だ、黒！！】

衝撃が、千早を貫く。

爆ぜんばかりに眼を張った彼女の瞳は――禍々しいほどの、深紅の色だった。

耳をつく雨音。

部屋は厚いカーテンのせいで薄暗い。

「また雨……」

カーテンごしに千早は呟いた。悪夢を見た翌日は、決まって雨が降っている。

もう、雨が続いてどのくらい経ったか、千早は覚えていなかった。

千早は窓の外を見やった。

千早の部屋の窓からは、裏庭が見えるのだ。手入れされ、鮮やかな花が零れ咲く表庭に比べて、裏庭は幾分か寂れて見える。

そして、そぼ降る小糠雨のせいもあって、どこか薄気味悪くさえあった。

だが千早は、この裏庭が好きだ。

いつも見る夢は、この裏庭が始まりだから。

以前はいつも薄暗くて、気味の悪い裏庭も、雨降りも大嫌いだった。なのに。

この裏庭が【懐かしい】のは何故だろうか。

雨降りが好きなのは、どうしてだろうか。

しかし、いまや千早にとっては取るに足らない、些細なことではないことだった。

【――――時期が来た――――】

確かに、誰かが云った空耳を聞き、千早は部屋の中に視線を廻らせる。

窓を開けて、雨にけぶる裏庭をも探すが、そこに誰がいよう筈もない。

ただ、薄闇が重々しく横たわり、雨が降っているだけだ。

「なんだ、いまの声は……どこからした」

空耳――――いや、そんな生易しいものではない。

確かに　そこ　にいても、姿の见えない干涉者。

なにかが、見ている。

雨の日の別れ（前書き）

『どうか……どうか目覚めないで、お願い、千早を人間にしておいて』

だが、母の願いは叶わず……千早は目覚めてしまった！

そこに、千早の覚醒を察知した妖犬族（千早の母・耶廉の種族）の男・青桐が現れる。

雨の日の別れ

誰がいる！

千早は、耳の奥で大きな騒めきを聞いた。

騒めきはやがて、警鐘に変わる。

父と母、使用人、そして庭師の老爺以外を、千早は見たことがないのだ。

（誰だ……誰なんだ！？）

高まる恐怖心。

堅固に四方を囲む警報機があるはずなのに、一体何者が忍び込んだというのか？

しかしこの時は、好奇心が勝った。

「そこに、誰がいるのか？」

雨に濡れるのも厭わず、千早は裏庭にまろび出た。

細かな雨音が、耳元を掠めていく。なにかもが無音に思われたその刹那、押し殺した、低い男の声が云った。

【妖犬族^{われら}の声を聞くとはい……やはり、おぬしは目覚めたか】

「誰だ！」

雨に濡れた千早の黒髪が、水分を含んで鈍い墨色に光る。

【気丈な娘よの……それ、ここにおるわ】

泥が寄り集まる。――いや、泥ではないのかも知れない。

不自然に蠢きながら『それ』は人間とおぼしき姿をとった。

千早は悲鳴を上げそうだった。しかし声が喉に張り付き、声が出ない。

「よ、妖怪……」

彼は、墨色の髪を煩そうに掻き上げると、真つすぐに千早を見た。

その瞳は赭^{あか}――血の深紅だ。

千早の前に立つ彼は、見かけは若いようで、それでいてそうでもな

いような、不可思議な雰囲気を発していた。

【やっと目覚めたようだな、待ちわびたぞ。我が姫、そなたを迎えに来たぞ】

「冗談！ ヘンな物に付いていくほど、あたしはバカじゃない」
差し出してきた男の手を、千早は思いきり払いのけて怒鳴る。

【ほほう、その『ヘンな物』の血を、おぬしも引いているのだぞ】
「嘘だ！ あたしは人間だぞっ、バカなこと言うな」

それでも、くつくつと面白げに笑う男を、千早は初対面にして、心底嫌いになった。

その端正な顔を綻ばせて、男は食らいつく千早を弄ぶ。

【信じられぬのなら、母に聞くがよいさ】

「母さまに……なんてだ!？」

【自分は 鬼 なのか、と】

「……鬼……？」

オニ、鬼……なんの鬼だろう？

追^{ついな}難なら、もう二月も前に済ませたはず。

【おぬし、可笑しな事を考えておるな】

笑いを含んだ男の声が、さらに千早の波立った気持ち逆なでにした。

無礼千万、この上ない。

「なんだと！ 人をどこまでもバカにして、楽しいか!」

そこまで怒鳴りかけて、千早はハツと口を噤んだ。

「千早、どうかしたの？ そんな大声をあげたりして」

振り向いたそこに、傘を差した母がいたからだ。

【そうら、聞いてみるがいい……知りたくはないか？ 己のことを】
声は尚も笑いを含んで、千早を唆す。

それでも千早には、先に進む勇気がなかった。

【なんだ……怖じ気づいたのか？ 仕方ないのう、俺が言ってやる】

依然、小雨は止む気配がない。

しとしとと慎ましやかに、涙を落とし続けている。

【久しいのう、かれん 耶廉……俺を覚えているだろう？】

母が大きく目を張り、短く息を詰めるのが見て取れた。

「そんな……まさか、どうして……お前にここが解ったのです」

千早は、これ程までに怯える母親を、初めて見た。

「母さま……？ この男を、知っているの？」

耳の奥で鼓動が煩い。

戦きで、全身を血潮が逆流している。

「……青桐……」

母は、云った。

「青桐……それがこの男の名前？ どうして彼は、あたしを知ってたの？」

困惑した千早は、幼子のように母の着物の袖を引く。

「千早、騙されてはダメ……この男は」

そこまで言いかけた母親を、青桐は幾らか鼻白んで云った。

【「こ奴は逃げたのだ、我が一族からな」

「逃げた……？」

鸚鵡返しに呟いた千早の肩を、いつの間にか、青桐が引き寄せていた。

【「耶廉よ……千早が目覚めたはそなたの咎ぞ。絶命などと、愚かな真似はせぬ事だ」

「どうして、母さま……どういう事？ 目覚めって、鬼 ってなんなの？」

その怯えた声にビクリと肩をすくめた母親は、悲しげな絶望の眼差しで、我が子を見つめた。

「覚醒めざめなど、来ないと思っていたのに……来なくてよかったのに。知ってしまったのね」

【「千早はお前などよりも、優れた能力を持つておる……これが今生の別れ。忘れるが、おぬしの為じゃ」】

「……母さま……」

娘の、濡れて墨色に光る髪を愛おしげに撫でつけながら、母親は嗚咽を堪えていた。

「この子を連れて行くというのなら、約束して頂戴……必ず、千早を守ると」

【いいだろう……千早は俺の相棒パートナーだからな、そうなると決まっていたことだ】

青桐は千早の手を牽きながら、片手で腰の刀を抜いた。

引き抜かれた刀身が、雨を含んで、ぬらりと鈍色に嗤う。

一閃。

青桐は、雨でけぶる宙を斬った。

斬られた空間は、雨の重みを含んで垂れ下がる。

雨の幕を翻し、青桐は千早の肩を抱いて空間の狭間・あわいに消えていった。

あわい　の底は、光に満ちていた。

夏の陽光より眩しい空間は、草の海が漣を描いてたなびき、色様々な花が、思い思いに咲き乱れていた。

道なき道を、二人は連れ立っていく。

「お前、幾つだ？」

「先に、アンタから言えよ」

にべもなく突っぱねた千早に、青桐は苦笑を浮かべた。

「勝ち気な奴だ……」

千早は青桐を引き離して、歩調荒く先を進んでいく。

「こらこら、話は終いまで聞けよ」

「なんだっ」

歩みを止めず、千早は青桐を見ようとしめない。

「幾つかと聞いたな、応えてやろうか」

からかいを含んだ声に、千早は怪訝に片眉を上げて立ち止まった。
「そうだなあ……見かけのよりは長く生きてる。おぬしよりは年上だな」

「大体20代後半あたりだろ。あたしは20……年増なんかに興味はないよ」

つんと顔を逸らし、とりつく島もない千早に、青桐は遂に噴き出してしまった。

「なに怒ってるんだ。――ああ、さっきの事か？」

「そうだな。――けど違う。あたしをどこへ連れて行くつもりだ？ それに、結局 鬼 がなんだか解らなかった。なんなんだ、鬼 って」

眼光鋭く睨みつける千早に首を竦めてから、青桐は足元に生えていた花の一房を千早に渡す。

「やるよ、それ……飾ってやるから少しは落ちつけ、なっ？」

「くくくつ、あたしは子供じゃないんだぞ！ バカにしているのかつ、さつさと教えろっ」

「分かった、怒鳴るなよ。 鬼 は長きを生くる者……勿論人間とは違う。変幻自在なんだ、お前もさつき見ただろ？」

悪びれた風もなく二カツと笑いかける、青桐の端正な顔に一瞬見惚れかけ、千早は慌てて抗議を再開させる。

「答えになってない！ ここはどこで、あたしをどうする気だっ」

必死に怒鳴る千早に、青桐はまたも肩を小さく竦めて見せた。

「ほれ……少しは落ちつけ」

きいきいと煩く騒ぐ千早の髪を、青桐はやんわりとかき混ぜてやる。

「ちよつと……やだつてば、要するに、妖怪の一族って事？ 母さまも、みんな隠してたの？ 最悪の展開だわっ」

千早は腕組みして、つんと明後日の方を向く。

「手っ取り早く言えばそうなるか、千早……これだけは言っておく」「なんだ」

不機嫌も露わに振り向く千早の頬には、青筋が浮かんでいた。

「お前の母は一族を裏切った、下界でお前を産んですぐに雲隠れしたのだ。行方知れずのお前を、俺たちは手を尽くして探し出し、いまようやく捕まえた」

青桐の真摯な瞳に、千早はどこか居心地悪そうに身じろぎした。

「だから、なんだ」

千早の背筋が、急速に凍りついていく。

聞きたくない。

聞きたくない、なのに……。

逃げることも、耳を塞ぐこともできなかった。

「お前は、長の孫娘だ。そして俺は、お前の守護者。お前が生まれると同時にそう定められた」

千早は真っ直ぐに青桐の目を見返した。

「長って……アンタの一族の？」

「お前でもあるんだぞ、そんな顔するな」

鼻面を抓まれて、千早は思いきり青桐の手をはたき飛ばす。

「そんなこと、言っただって……」

千早は戸惑う。

それ以外に、どういう反応をすればいいのかさえも分からない。

しかも、いきなり事実を告げられても、そう簡単に受け入れられるはずもないのに。

自覚はあっても、実感が沸かないのだ。

この男は、自分をどこまで連れて行くのだろうか……？

「これから、どうするつもりだ？」

おずおずと尋ねる千早に、青桐は大仰に頷いた。

「これから行くのは長の屋敷だ……一族の者は、外から戻ると必ず長に会うことになっている」

「長って……どんなヒトだ？」

長　だなんて、いま時分はなにかの時代劇でしか聞いたことがない。

（いま何時代だよ……戦国時代か？）

それを聞いて、千早はますます萎縮してしまった。

「立派な方だ……厳格で美しい」

「……ふうん」

「立派な方でな、俺の父親代わりだ」

ただ頷いただけの千早に、青桐は大まじめに説いてみせる。

「……そうか……」

急激に景色が移ろっていき、花々の咲く青草の原から、まるでそこだけを切り取ったような、川砂利を曳いた黒土の大地が現れた。

さだめの入り口（前書き）

異形の血を引く少女・千早。

千早は人ではない『異種族』の血を引く者だった！

そんな千早の前に現れた青年・青桐は千早を連れて異世界・『常世』に連れて行くつもりでいた。

千早に待ち受けるさだめとは？！

衝撃！ 妖世界再び……！

さだめの入り口

川砂利を曳いた道を行くうちに、疎らにだが、人の姿を見かけるところができた。

砦を護る門番に、青桐が目配せすると、門番は恭しく口上を述べた後に道を開けた。

千早には、話の大半が分からなかったが、そこは適当にしておく。

「なんて言っただ？」

千早は幼子のように、前に行く青桐の袖を引いた。

「姫を連れて戻ったと言っただ……みな歓迎しておるぞ」

「……姫って誰だ」

なんともイヤな予感がして、千早は身構える。

「阿呆、お前に決まってるだろうが……俺が女に見えるか」

「なっ……！ アホとはなんだっ、アホとはっ」

地団駄を踏む千早をからかいながら、青桐が眩しげに目を細めたのを、彼女は知らない。

スカートがめくれるのも構わずに、千早は青桐に食い付くが、まるで箸にも棒にも掛からない。

「どうした、もう終いか？」

にやつく端正な顔が憎らしくて、千早は隙について彼の臍を蹴り上げた。

「おお、絶景……不意打ちときたか」

奥の手まで身軽によけられて、千早は遂に地べたに座り込んでしまった。

「っ、強いな……」

「お前も、女子おなこなのに随分と武芸がなじんである」

（なんとまあ……勇ましい姫だ）

驚いたように言って、（実際驚いたが）青桐は千早の埃を払ってやった。

「ほれ」

「いつ、いいよ……自分で立てる」

差し出された手を押しのけて、千早は頬を赤らめた。

こんな事は、20年間生きていて初めてのことだ。

自分に敵うような男など、まわりにはいなかったし、負けたことなんてなかった。

「そうか。さぞやお館様も、お喜びになろうな……こんな勇ましい姫が戻って」

何事もなかったかのように言って、青桐は先を歩き出す。

（強い男……こんな奴、初めてだ。もう、振り向いてはくれないのか……）

――もつと知りたいのに。

青桐の背中を見ながら、千早は密かに落胆の溜息を落とした。

どうしてか、初めて男のせいで胸が痛んだ。

やがて寝殿造りの建物が見え、千早は緊張に身を凍らせた。

なぜなら、大路を埋め尽くす者すべてが、顔を伏せて伏礼していたからだ。

だが唯一、玉座とおぼしき座に座る男だけが、真っ直ぐに千早を見つめていた。

年を経た、彫りの深い端正な顔の男だ。

「おお青桐、戻ったか……」

「はっ、お館様」

恭しく態度を変えた青桐に、千早は焦る。

声は出ずに、千早は目線だけで彼に問う。

（どうしたんだ、急に態度変えるなよ）

「青桐、姫を近うに」

玉座の男は青桐に命じると、再び、にこにこ千早を見つめた。

「はい……」

千早は、促されて前に出る。

覚束ない足取りで進み出た千早を、玉座の主はきつく抱き締めた。
「よく戻ってくれた。千早、我が姫よ」

感涙に浸る彼の腕の中から、千早は青桐の姿を探した。
つい先まで傍にいたはずだ。

守護者なのだから、いつも傍にいたと思っていた。

なのに、見当たらなくなっている。

なんともいえない物がこみ上げて、遂に千早は玉座の主に尋ねた。

「青桐は……彼は、どこにいるの？」

すると、――、玉座の主は目を細めて、くつくつと静かに笑った。

「あいつはな、次の任務に行った……当分戻らぬだろう」

「どういうこと？」

「おお、千早は知らなんだか……あ奴は忍なんだよ」

「え……」

置いてかれた。

ここに来るまで、彼が一番傍にいてくれたのに。

任務だか知らないが、彼は自分を置いていったのだ。

その衝撃から立ち直れず、千早はやや暫くぽかんと惚けたまま動けなかった。

「長旅、さぞ疲れただろうに……皆の者、本日はこれにて開きじゃ
！」

玉座の主は千早の肩をやんわりと抱くと、大音声で廻りに集まっている者に言い渡す。

彼の一言で、その場にいる者すべてが退場の口上を述べた。

さだめの入り口（後書き）

どうも、維月です。

千早の性格が、男っぽすぎたかな……？

この子の性格は、基本的にじゃじゃ馬です。（汗）

そして、青桐。千早の守護者の彼ですが……

っとお、ここで語るのはやめておきましょうか。

気になる方は、作品までどうぞ。

それでは、失礼します。

運命の輪舞（ロンド）（前書き）

異種族・——妖犬族（千早の母・耶廉と同族）の長の元へ連れてこられた千早。

千早は、そこで自らの出生の謎を知る！

ショックを受けた彼女は……！？

運命の輪舞（ロンド）

宛われた部屋で暫く休んだ後、部屋を訪った城主に連れられて、千早は広間に通された。

広い室内は、有名旅館の一室を思わせる。

古い独特の匂いが、幾許か千早の緊張を解いた。

「千早」

「あ、はい」

青桐のことを考えていた千早は、どこか後ろ暗く、赤面してしまった。

「すまぬ……訳も分からぬまま連れられて、さぞ不安な思いをしただろう」

皺の寄った目元を和ませて、彼はひどく悲しげに微笑んだ。

その顔が、別れてきた母と重なる。

（母さま……母さまに似てる）

「娘に……耶廉によく似ておるな。千早よ、出生を知りたがっていると、青桐から聞いた」

「青桐から!？」

（えっ、青桐があたしのことを……なんて?!）

「そうだ」

勢いよく席を立った孫娘に微笑んで、彼は、再び座るよう促した。

「我らは長きを生きる者ゆえ、下界では鬼や妖怪と呼ばれている…

…それで間違いはないんじゃない。我らは【人】とは違うのだ。人界では暮らせぬのだよ」

深々と溜息する当主である彼に、千早は一番の疑問をぶつけた。

「母さまは、どうして逃げたの？」

「ぬ……!」

彼は暫し言い渋った後、千早の出生を話し始めた。

「娘はこの世界で、次期当主として一族を継ぐはずだった……」

「けど、母さまは逃げたのか」

大仰に頷く祖父に、千早は深く溜息した。

（母さまと、父さまが出会ったからだ）

「あいつは、掟を破った……交わってはならん者と結ばれ、子をもつけた」

苦虫を噛み潰し……いや、噛み殺したような言い方に、千早は悪寒を催した。

それが自分だと。

そうして、生を受けたのは自分だと。

千早はどうしてか、涙が溢れるのを止められなかった。

（あたしは……生まれてきてはいけなかったのか？）

涙する千早の肩を抱きながら、祖父は幼子に言い含めるように、ゆっくりと優しく言った。

「千早、我が一族で生きてくれ……一族を、頼む」

千早は頬を伝う涙を拭い、祖父を見つめ返す。

もう、自分はどうすればいいかは分かっていた。

（母さまの、代わりになれと言うのか。あたしには、その程度の価値しかない）

「分かった、ここに来た以上は……そうするしかないんだろ？ それ
が、あたしのさだめ」

「分かってくれたか……よかった」

五月雨の庭（前書き）

異種族……妖犬族の姫として、祖父の元へ連れてこられた千早。
彼女は、そこで運命の選択を迫られる！
そんな千早は、青桐にあわい想いを寄せ始めて……！？

五月雨の庭

「……はあゝ」

よく手入れされた庭園の見える、部屋の青畳に伏したまま千早は、本日何度目かの溜息をつく。

行儀悪く、ごろりと寝返りして五月雨にけぶる庭を見ていた彼女を、穏やかな中音の声が咎めた。

「ほらほら姫様、せっかくのお召し物が台無しですよ……起きてください。甘味をお持ちしました、白桃……お好きでしょう？」

「……うん……」

千早はのろのろと起きあがると、本意ではないが、瑠璃の碗を差し出しながら微笑む青年を見た。

彼の名を彩軌さいきという、青桐直属の部下だそうだ。

（青桐……早く帰ってこい。早く、お前ともっと話がしたい）

「……青桐」

意に反して思わず出た言葉に、ハツと口を噤むが遅く、彩軌が小さく首を傾げた。

その仕種が、どこか少女のようで。

線が細く、女性と見紛う容姿の彼が、青桐と同業とは思えない。

それが、少し悲しい。

「青桐が心配ですか？ 姫」

「げふうつ！ べっ、別に心配なんか！ ……してないことも、ないけど」

食べた白桃を喉に詰まらせかけて、目を白黒させる自分を見て軽やかに、本当に面白そうに笑う彩軌を、千早は涙目できつく睨んだ。

（うわ……涙目！）

「わっ、笑うな！ 急に青桐の話なんかするからっ」

「姫は本当に可愛い、あの青桐が大切にしたがるのも頷けるよ……」

「可愛いとか言うな……彩軌の方が、あたしよりもっと女らしい」

「姫…俺、これでも男ですよ？」

彼のきれいな笑顔が、半分引きつっている。どうやらそれは禁句のようだ。

「悪い……でも、キレイなのは確かだぞ」

「話を戻します、いいですね？ 青桐は、この常世ノ国の忍者ですが……彼に関する詳細は一切……誰もが不明だと言います」

一つ咳払いをして、彩軌はその表情を曇らせた。

「やっぱり強いんだな、青桐は……」

「あれ、白桃、もう召し上がらないので？ 千早姫？」

「……ああ、もういい」

千早は、碗を床に置いて立ちあがり、一人縁側に腰掛ける。

うわのそらに応えた千早の後ろ姿を、彩軌がどこか切なげに見つめていたのを、彼女は知らない。

再び静寂が訪れ、ただ五月雨の雨音だけが僅かに響く。

（頭領あおぎりの事しか、姫は考えておられない。青桐ではなく、もし自分が守護者だったなら、姫は俺を見てくれるのだろうか？）

痛い。

痛い、胸が痛い。

姫……せめて紛い物でもいいから、俺を見てください。

「なあ彩軌」

そんな彩軌の心境を見抜くように、千早がふり返った。

「はい」

「気を病ませてしまったようだな、すまない。あたしの事なのに、お前のほうが痛そうな顔をしていたぞ？」

「え……」

五月雨の庭を背に微笑む千早の目は、泣いている。

小さな肩が震えないように。

自分が震えているのが知れないように、必死に堪えている。

「……姫……」

（お館様は、なんて酷なことをなさるのか……まだ目覚めてもいない彼女を連れてきて。結局は……殺してしまうのに）

さぞ、心細いだろうに。

「青桐なら大丈夫ですよ。あの方なら今頃、国内のあちこちを飛び回っているでしょうね。他国からの要請ですが、ああ見えても忙しいのですよ。ですが……姫が呼べば、彼は必ずあなたの元へ戻ってきます」

「うん……きつと、戻ってくるよな」

もう、なにも考えられない。

彼がいないなんて。

考えたくない。

彩軌がなにか言っていたが、千早はわざと聞かないようにした。考えれば考えるほど、会いたくて堪らなくて。敢えて耳を塞いだのだ。

（……それに……）

待つのは、いつも辛い。

『おう千早、以前よりは強くなったな』

『ホントか！』

今でも、よく覚えている。

旅の被い師をしていた父とは、帰ってくる度に、いつも武術の手合わせをしていた。

「父さま、本当に行くのか？ 物の怪退治に」

「ああ……それが被い屋の使命だからな」

「行つてらっしゃい、父さま！ おみやげ持ってきてねっ」

「おいおい……遊びに行くんじゃないんだぞ？」

じゃれつく愛娘を抱きあげて、頬傷のある、端正な顔をほころばせて父は笑った。

「大丈夫、父さまは強いから！」

「そうかあ、じゃあ……母さまと留守を頼んだぞ」

「うんっ」

思い出すのは、いつも「行ってくる」の笑顔と、大きな手の温もり。そして――。

「奥さまあ！ 旦那様が……旦那様がっ」

父は、帰ってきた。

冷たい、亡骸となつて。

「父さま……父さまああ、死なないって、言ったのにっ……！」

そして……無言の「ただいま」と、雨の日の慟哭。

だから待つのは不安で、それを思うと泣きたくなる。

「姫さま、なにを！ お風邪を召されますっ、早く中へ！」

裸足のまま、雨の中に出た千早を抱きあげようとした彩軌は、^{つよ}強い瞳に射抜かれて、咄嗟に手を離してしまった。

「姫……？」

「頼む、あたしのことを思うなら……このまま、一人にしておいてくれ。待ちたいんだ、自分の目で戻ってきた青桐を見たい」

ぱしゃりと、裸足が水溜まりを踏んだ。

やがて小糠雨は、刺し貫くような土砂降りに変わる。

「だから、お前は中に戻ってくれ。一緒に風邪を引くこともあるまい」

土砂降りの中、その背中を切なげに見つめていた彩軌は、きつく齒

を食いしばっていたがやがて、踵を返して館へ戻っていった。

「すまないな……あたしは、青桐がいいんだ」

小さく呟いてから、しつとりと濡れた髪を掻き上げて、千早は鈍色の空を仰ぐ。

雨音が満ちていく。

冷たい雨なのに……なぜか心地よかった。

「早く戻ってこい、逢いたい……」

頬を、雫が滑っていく。

それが雨なのか、涙なのかは、彼女自身にも分からない。

ただ、それだけしか考えられなかった。

と、その背後で、ばしゃりとなにかが水を踏んだ。

慌てて振り向く千早。

そこには、青桐がいた。

腕には刀傷、太股には黒塗りの矢が刺さって血が出ている。

返り血だらけ、泥だらけだが……確かに青桐本人だった。

「青……桐？」

「お前、そんな格好で……なに泣いてんだよ」

「だって！」

「っつと」

きつく抱きついてきた千早を、青桐はどこか嬉しそうに受け止める。

「……当分戻らないってっ、置いてかれたかと思って」

きつく抱きついたまま泣きじゃくる千早を抱き返して、青桐は大仰に溜息した。

「馬鹿が……俺がいつお前を置き去りにしたよ？　ちゃあんと戻ってきただろうが」

「もう離れるな！　あたしの傍にいろっ」

ぐずぐずと鼻を吸る千早に苦笑いして、青桐は抱き寄せた彼女の額

に口づけた。

「なんだ、俺に惚れたのか？」

冗談交じりに言う青桐に、千早は思いきり赤面してしまう。

「ばっバカ！ そんな訳あるかつ、お前はあたしの守護者なんだから……ただ、それだけだっ」

（戻ってきて、よかった）

初めて『傍にいて欲しい』と思えた男。
もう離さない。

「……とりあえず、傷の手当てをしないと。入ろう、中へ」

雨に濡れた小さな肩がどこか愛しくて、青桐は眩しげに目を細めた。
（この姫は、俺の帰りを待っていた……俺なんかのために、雨に濡れて）

――愛しい。

そう思ったのは、錯覚だろうか？

「なにしてる、置いてくぞ？」

千早が不思議そうに振り向く。

「あ、ああ？」

「青桐……」

追いついた青桐の手を握り、千早は小さく、だがはつきりと言った。

「青桐……おかえり」

「……ああ」

ニイと、不敵に笑う青桐の傍で、千早は幸せを噛みしめている。

「雨降って、地固まる……ですね」

柱の陰に潜みながらくつくつと小さく笑って、どこか寂しそうに彩軌が呟いたのだった。

姫としての役目（前書き）

妖犬族の姫としての　さだめ　にうち拉がれる千早。

だが千早には、想う相手がいて？

護衛役の忍・青桐との禁断の恋。常世ノ国・最強忍者と姫。のめり込んでいく千早の運命は如何に！？

姫としての役目

屋敷に招かれた日、そのまま茫然自失の体で、千早は迫りくるさだめを受け入れた。

正嗣（ちなみに祖父の名だ）の城館で暮らすうちに、千早は【姫らしく】を義務づけられるようになっていた。

華道に、和琴、裁縫、歌。

そして、——もちろん身だしなみも。

しかしそれが、千早にできよう筈もなく。

「あゝ——もう、重いんだよこの着物っ！」

千早は、幾重にも重ねて着付けられた十二単の打ち掛けを脱ぎ捨てた。

しかしそれでも重く、五体の自由を奪うのは変わらない。

「あんたは涼しげでいいよな……どうにかなりそうだ」

千早は、縁側に寝ころんでいる青桐を、恨めしげにじっとりとねめつけた。

「しとやかで、結構結構」

「お前に分かるか、この気持ち」

腐って床に潰れたままの千早を肩越しにふり返って、青桐はさも可笑しげにくつくつと笑った。

「なにが可笑しい」

眉間に皺を寄せ、嫌悪も露わな千早に危うくまた嘔き出しそうになり、なんとかそれを耐える。

「いや、お前もそうしていると、ただの女子だな」

「なんだよ……文句あるのかっ」

「……別にいい」

どこまでもふてぶてしい青桐に、千早は苛々（いらいら）する。しかし祖父や、世話をしてくれる女官らがおらず、青桐と二人きり

で話をするときが一番安らぐのも確かだった。

「なんで、あたしなんかが姫なんだ」

俄雨にぼやける、庭園を遠くに見つめながら、千早は虚ろにぼつりと呟いた。

その横顔に、青桐はいたたまれない想いを隠せない。

だが、これも務め。

姫の意味を、役割を教えなければ。

「姫の役目は……世継ぎの男児を産んで、一族の繁栄を図ることだな」

「……っ!？」

千早の動揺は明らかだ。

憐れで仕方がない。

「そ、んなこと……知るもんか」

青桐はいつの間にか、千早の声が、鼻にかかった涙声になっている事に気が付いた。

(そりゃあ、辛いよなあ……まだ若いのに政略結婚とは)うち震える彼女を、憐れだと思う。

しかし一介の忍者が、手を下せるものではない。如何なるときも、主を忠実に護るだけの、たかが【護衛役】に過ぎないのだ。

「泣くなよ……必ずお館様がよきに計らってくれるさ」

「イヤっ……そんなのはイヤなんだっ」

「っおお!？」

勢いよく抱きついた千早に目を丸くして、まごつく青桐。

「イヤだ……イヤなのに、青桐い」

だがやがて、青桐はおずおずと、千早を抱き締めた。

「泣くな……頼むから、泣いてくれるな。お前の泣き顔、調子が狂う」

「ううっ……好きでもない相手なんて、一生かかっても、好きにな

どなれないっ」

しゃくり上げる千早の背を宥めながら、青桐は改めて想いを固くした。

【なにがあるうと、この姫を護ろう。たとえ、この命が失われても】と。

「青桐……？」

「……なんだ？」

先よりも、胸板に強く抱きついてきた千早に、青桐は頬を赤らめる。

「ずっと……このままがいい」

「！？」

初めて聞いた、女らしい千早の声。

青桐は一瞬、鼓動が跳ね上がったのを感じた。

それに……。

顔が、どんどんと赤くなっていくのが分かる。

どんなに勝ち気で、勇ましかろうが、彼女は【女】なのだ。

（イヤ待て！ コイツは姫であって、俺の主だ……そんなこと、しちゃならねえのは分かってる）

葛藤すればするほど意識してしまい、青桐は慌てて邪念を振り落とす。

だが、間に合わなかった。

「さだめ　なんて、壊してやる……そんなモン捨てちまえよ」

「できるのか？」

もぞもぞと身じろいだから、きょとんと聞き返した千早を、青桐はより強く抱き締めて笑った。

「できるさ……二人で逃げよう」

「え……？」

「……愛してるぜ、姫」

唇同士が触れる。

「あ、青桐……んんっ」

夢中で唇を貪り合う二人を、柱の陰から千早の祖父・正嗣が見ていた。

姫としての役目（後書き）

どうも、維月です。

千早と青桐は惹かれ合い始め……逃避行へ。

ああ、またキャラが勝手に動いていく。（汗）

こんなつもりじゃなかったのに……（ノ・イ）

妨害（前書き）

異種族・妖犬族の姫として本拠地・【常世ノ国】に連れてこられた
千早。

彼女は迫り来る さだめ をかなぐり捨てようと決意する！

そして、守護者でもある、この国の最強忍者・青桐との激しい恋。
駆け落ちを画策する二人だが……？！

妨害

「あ、風見……青桐を見なかったか？」

千早は、偶然朝餉を運んできた風見という女官に尋ねた。

「お、畏れながら…姫さま、存じ上げませぬ。しつ、失礼致しました」

その顔には、動揺も明らか。

彼女はさつと顔を青褪めさせると、そそくさと部屋を出て行ってしまった。

「待つて！ 待つてくれ……頼む、なにか知っていたら、教えてくれないか。青桐がいなくなつて、もう七日過ぎた。流石にヘンだろう？」

女官の慌てように感じた千早は、嫌がる彼女を拝み倒して、なんとか話を聞き出すのに成功した。

「青桐殿は、お館様のご命令で……東の離れに繋がれております。姫さま、どうかこの事は他言なさらぬよう」

すべてを話した後、風見は手を揉みしぼって哀願した。

「分かつてる、ありがとう風見。東の離れだね！」

「……いいえ」

礼もそこそこに駆けだして行つた千早の姿を見送つて、風見は落胆の溜息をついた。

彼女の姿が歪んだ。

「……それは恰も、飴が溶解するよう。」

そこには、千早の祖父・正嗣が佇んでいた。

「千早は……毒されとる」

正嗣は、戸口の影に寝込んでいる本物の風見を振り向いて、小さく呟いた。

東の離れには、厩^{うまや}がある。

小屋の中の檻に、彼は捕らえられていた。

「……くそ……」

手足を戒める鋼の鎖が、さりさりと耳障りに揺れる。

戒めさえなければ、今すぐにも千早姫を攫って、ここから逃げるのに。

青桐は、むぎむぎと捕らえられている己を呪った。

「この【常世ノ国】最強忍者のお前が……なにを血迷うたか」

冷淡な声の主に、青桐は忍ばせていたクナイを梁に向けて投げつける。

轟音と共に梁が崩落し、家畜の悲鳴が小屋を震わせた。

「初めてだな、お前が私に逆らうなど……それ程のことか」

戒められた青桐の目前に佇むのは、紛れもないこの城館の主・正嗣だった。

「千早は我が一族の希望……むぎむぎ渡すわけにはいかぬ。それでも逆らうというならば……お前には、ここで死んでもらおう」

半眼を開いた正嗣に、青桐は憤りを隠せず遂に怒鳴った。

姫の さだめ が重いと。

心細い、と。

苦しい、と。

彼女は泣いていたのに。

あんなにもか細くて、若い彼女を。

この男は、計画のために殺すという。

彼女は泣いていた。

「本人の意思はどうなる！ 彼女は苦しんでもいいというのか。そんな定めなど、俺が断ち切ってくれる！」

「うぬ……」

「生憎、こんな処で死ぬ訳にはいかねえんだよ……通してもらおうか！」

――ドン――！

なにかが壊れる音を聞きつけて、千早は厩の入口に立ち止まった。

「じい……様？」

そこには、袈裟斬りにされた青桐と、血刀を片手にした正嗣がいた。

「青桐！？ じい様、なぜ彼をつ……青桐、しっかり、青桐！」

慌ててまろび寄った千早は青桐を抱きかかえて、涙の溜まった紅い瞳できつく祖父を睨み据える。

「へっ……これしきでくたばるかよ、泣くんじゃねえ」

厩の黒土に、ボタボタと血が滴り落ちる。彼が立ちあがったのだ。

ゆらりと起きあがると、青桐は血を吐き捨てて、千早を抱きあげた。

「や、やめろ……傷が開くだろう！ 下ろせ」

「るせえ……少し黙ってな」

血で汚れた手でそっと撫でられて、千早はなぜか大人しくなっていた。

「き、貴様……この下郎っ、姫を離せ！」

正嗣は、再び刀を構える。

（きつ、汚い！ じい様、あなたは……なんて汚いつ）

千早の瞳の奥で、紅い炎が揺らぐ。

その時、千早の中で、なにかが切れた。

「追われたっていい！ あたしは青桐と行きますっ、刀をおろせ！」
その剣幕に、正嗣は気圧されて半歩下がる。

孫娘の変貌に、正嗣はいくらか驚いたようだった。

「なにを言う千早、おぬしはまだ、生まれて間もない赤子同然なのだ……誑かされてはならぬ」

千早はゆるゆると、左右に首を振る。

「それは違う、じい様……あたしの意思だよ。だから、ここにはもう戻らない」

先から曇り始めていた空は、既に暗く垂れ込めて、今にも泣き出しそうだ。

「そう簡単には逃がさぬぞ……必ずや見つけてみせる」
「……却下だ」

二人同時に言った言葉に、正嗣は苦虫を噛み殺した、なんとも渋い顔をした。

妨害（後書き）

あああ……穴があつたら隠れたい。（<—>）

変若（おち）（前書き）

異種族・妖犬族の姫として連れてこられた千早。
千早はそこで、自らの守護者であり『常世の国』最強忍者・青桐と
恋に落ちて駆け落ちを画策した！
一族から二人だけで逃げられが……？

変若（おち）

「くっ………血が足りねえ」

逃げて。

逃げて、もうどのくらい逃げたのか分からなくなった頃、遂に青桐が膝をついた。

このまま雨に打たれるのは、傷を負った彼にとって芳しくない。

千早は肩を貸して、大樹の根本まで青桐を連れて行った。

目の前には、どこまでも遙かな草海原が広がる。

雨にけぶる草原は、美しかった。

「泣いて、いるのか？」

弱々しい手が、千早の頬を拭う。

千早は、その手を握りしめて頬擦りした。

「だって……お前が」

瞬く間にその頬を、ぽろぽろと涙がこぼれていく。

「……死ぬなよ」

深く息を吐いて、青桐は「ああ」と頷いたきり、動かなくなった。

「青桐……青桐っ！」

「……と、彼の体が、大きく歪んだ。

ミシミシと骨が歪む音、鼻先が細く尖り、牙が剥き出しになる。

変化を見送るうちに、そこに大きな狗が現れた。

「……青桐？」

おずおずとした千早の声に、彼の尖った黒い耳が、ぴくりと反応を

返した。

「まだ泣いてるのか」

黒い大狗になった青桐は、ぶるりと身震いして千早を組み敷く。

「俺もお前も……これが本性だ。恐ろしいか？」

うるると唸って、首筋に牙をかける。

「……心配して損した」

むくれ顔で明後日の方を向いてしまった千早の頬を、青桐はべろりと舐めて牙を剥いた。

「……— とうか笑った。

「お前が心配してくれるなら、怪我也悪くないな」

「バカか……」

千早は青桐を捕まえると、きつく頬を寄せた。

その顔は、赤い。

「嘘……心配した」

「……千早……」

青桐は、尖った鼻先で千早の口許に触れた。

「……ん」

唇が触れ合い、二人は暫しの情事に酔う。

長い、長い口づけだった。

「それにしても……どういう事だ？ ホントに人間じゃないんだな」

千早は唇を拭って、青桐の胸板を押し返す。

「あー……さっきのか？ あれは変若^{おち}だ。狗一族なら皆持つてる力だよ。大した傷じゃなきゃ、さっきのようになる」

「あたしも、ああなるのか？」

そう考えると、どことなく嫌な気もする。

もし自分が狗になるのなら、どんな姿だろう？

想像もしたくないが、紛れもなく、自分も彼と同族なのだ。

「そつだなあ……お前は目覚めて間もないし、変化は未定だろう」
未定。

いつか分らない、変化の時期^{とき}。

「いつか分らないのか……」

不安げに表情を曇らせた千早の頬に、青桐は再度口づけた。

「そう心配するなよ……自然に出来るようになるからな」

はたはたと尾を振る青桐の背を、千早は不思議そうにまさぐった。

「千早？」

「傷……もう治ってる？」

「浅かったから、すぐ消えちまったよ」

「変若つて、あたしにも使えるようになるか？」

すっかり悩み込んでしまった千早を慰めるように、風に送られた細かな小糠雨が撫でる。

「少し、休もう……明日から旅を始めるぞ」

雨宿りの木陰で、青桐は千早に寄り添いながら、大欠伸を噛みこころした。

「青桐……」

「……なんだ？」

眠そうに薄目を開けた青桐に、千早は羽織っていた打ち掛けを掛けてやった。

「これから、傍に……いてくれるか？」

「ばあか……決まってるんだろ」

溜息交じりに言って、青桐は千早の手を甘噛みする。

「一族の跡取りは産みたくないが……お前の子なら、産んでもいいかもな」

「はあっ!？」

千早のトンデモ発言に、青桐は慌てて跳び起きてしまう。

「お、お前」

うつたえる青桐の目ははちきれんばかりに見張られ、毛皮は逆立っている。

「イヤか？」

ニツと不敵に笑う千早に、青くなっていた青桐の顔が、急速に熱を帯びた。

「ほ、本当か？」

顔を朱に染めて詰め寄った彼は、いつの間にかに人間の姿に戻っていた。

「もう寝る……明日から旅なんだろう？」

ころりと大樹の根本に寝転んで、わざと寝息を立てる千早。

「た、確かに聞いたぞ、もう取り返しはつかないからなっ」

しどろもどろに言う青桐は、千早を揺り起こすと、こう付け加えた。

『冗談は抜き』と。

変若（おち）（後書き）

ああ、相変わらず青桐がスケベ臭い……（汗）
不快に感じられた方、申し訳ありません（<―>）

旅の始まりは……前途多難？（前書き）

妖犬族の姫・千早は、守護者であり、恋人でもある青桐と共に逃避行の最中だった。

逃避行の、そんなサイクルの一日の出来事。

千早が拾った子兎は……？

旅の始まりは……前途多難？

千早が連れてこられた国を【常世ノ国】という。

人界とは、国土の成り立ち方が違っている。

人界は、古くの神々が天地を作ったのに対し、この【常世ノ国】は古代に実在した巨人の亡骸から成り立つのだ。

その巨人の名を……盤古^{ばんこ}という。

当然に、人界とは風土も違えば、棲息する獣も種が違う。

基本的には、この世界に分布する獣は、妖獣・妖魔の類になるのだ。

「あ！ 青桐、兎がいるぞっ」

平野を渡る最中、千早が嬉しそうに青桐の袖を引く。

「なんだ、昼飯ならさつき喰っただろ？」

ちろ、と流し目され、千早は怒りに顔を染めた。

「ちつがう！ あそこに兎がいるだろ。触りたいんだ」

彼女が指さした場所には、兎が群れていたのだ。

しかし色が変わっている。

鬱金の地に、紅玉を散らした毛色もいれば、黒の地色に、背に雲母を散らしたような者までいる。

つまり、全くの無地がない。

「ああ……止めとけ、ありやあ黄兎だ。噛まれるぞう」

「噛まれたっていいんだ、動物の扱いには慣れてる。なあ、触ってもいいだろう？」

千早はそう言うや否や、群れている子兎たちの一匹を抱きあげて頬擦りする。

「かあわいい！ 大人しいな、お前」

子兎に夢中な彼女は気づいていない。

その背後に、小山ほどある母兎が、牙を剥いているのに。

青桐の牽制の声と、母兔の咆哮はほぼ同時だった。

ガウウ……ッ、ガアア！！

「千早っ！？」

「千早っ、早くそいつを離せ！ 余計に追ってくるっ」

青桐は千早を抱えて走るが、母兔との距離は縮まるばかり。

そればかりか、先より更に怒っているようだ。

「うわああ……だってこいつが離れてくれないんだい！」

それもその筈、千早の胸元には、鬱金色の子兔が宙ぶらりんになっていたのだ。

「さっさと捨てる！」

千早は子兔を掴みあげると「お行き」と小さく言って、母兔目掛けて彼を放り投げた。

「キュッ、キュイイ！」

ガアアッ！

彼女は、跳び上がる。

母兔は、息子の背を上手く銜えて受け取ると、鋭い一瞥を投げて去っていった。

「こ、怖っ……怖かった……」

母兔が去った後、千早は青桐の胸板にすがりついて震えていた。

旅の始まりは……前途多難？（後書き）

どうも、維月です。

12部のお届けにあがりました。

短い上、話の脈絡が、多分ないかも…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3891a/>

雨—標のない旅—

2010年10月14日12時50分発行